

文化 第80巻 第1・2号 一春・夏一 別刷  
平成28年9月24日発行

神輿渡御にみる「ケガレ」への対応  
—竹駒神社の初午大祭—

Alimansyar

# 神輿渡御にみる「ケガレ」への対応

## —竹駒神社の初午大祭—

Alimansyar

### 1. はじめに

一般に、「ケガレ」とは、「人の死や出産などの不浄。服喪中であること。また、月経中であること」<sup>1</sup>と説明される。しかし、大本敬久によれば、「櫻井徳太郎や波平恵美子らによる議論以前、つまり 1970 年代以前においては、『ケガレ』という用語が、学術語として用いられることはなく、一般の民俗語彙として捉えられる傾向にあった」<sup>2</sup>という。

1970 年代に入り、「ハレ」と「ケ」という、柳田國男以来、対概念として用いられてきた両概念をめぐる議論の中から、「穢れ」や「不浄」を「ケガレ」と表記することでそれを民俗学の分析概念として用いようとする動きが生まれてきた。柳田は、日常性を示す言葉として「ケ」、非日常性を示す言葉として「ハレ」を設定し、それが日本民俗学の基礎概念として長い間定着したのである。

以下柳田以降の議論を見ていくと、伊藤幹治は、「ハレ」と「ケ」は対比するものとはせず、相互転換が可能であるとした。つまり、日本の民俗社会に表象される「ハレ」と「ケ」の世界は、時間的にも空間的にも柔軟性に富んでいて、固定化されず、しかもそれぞれが相互補完的關係にある<sup>3</sup>と述べている。

伊藤の論に対し、波平恵美子は、「ハレ」と「ケ」というものを区別する考え方はないとし、「関係、構造を決定するところの構造原理」を明らかにする

<sup>1</sup>『日本国語大辞典』第二版 第四巻 P. 1303 (小学館、2001 年)

<sup>2</sup>大本敬久、2013『触穢の成立—日本古代における「穢」観念の変遷—』P. 9 創風社出版

<sup>3</sup>伊藤幹治、1973「日本文化の構造的な理解をめざして」(『季刊人類学』) 4 (2) P. 13-16、京都大学人類学研究会

という伊藤と同じ立場にたって、「ハレ」と「ケ」に「ケガレ」というカテゴリーを新たに加え、これらを三極対置させるといった「ハレ、ケ、ケガレ」論を示した<sup>4</sup>。波平は、「ハレ」は清浄性、神聖性、「ケ」は日常性、世俗性、そして「ケガレ」は不浄性を示す漠然とした概念とし、これらを理論的な枠組みとして用いた。そして、「儀礼において、『ハレ、ケ、ケガレ』がどのような関係として現れているかを調べることを主とし、それらの観念の内容について検討することを目的としない」<sup>5</sup>と述べている。

波平が、「ハレ、ケ、ケガレ」の三極を空間対置させたのに対して、櫻井徳太郎は、柳田國男以来使われてきた、日本人の生活を構成する基本的な要素として、日常的と非日常的を示す「ケ」と「ハレ」という概念に、「ケ」が農業生産を可能にするエネルギー源としての「気」から出た言葉で、日常生活のなかではケが絶えず発散され、やがて枯渇し、「ケガレ」＝「ケ枯れ」になる。この「ケ枯れ」の状態から再び「ケ」の活動を充足させるために行われるのが「ハレ」の行事であるとする。従ってケ→ケガレ→ハレ→そして再びケへ、という時間的循環構造が成立することを指摘した。<sup>6</sup>

このように「ハレ、ケ、ケガレ」について、それぞれの研究者は、異なる視点からアプローチをしてきたが、特に「ケガレ」について意見が別れていることが明らかである。これらが筆者の調査を行った竹駒神社において「ケガレ」と「ハレ」はどのように現れてくるのかを明らかにする必要がある。それについては、4節以降で詳しく検討する。

## 2. 問題と目的

神社は神を祀り、詣る神の座し所である<sup>7</sup>。そこは世俗の領域から区別された神聖な空間であり、氏子や崇敬者などの参拝者は必ず心身を清めてから神に近づかなければならない。

筆者はこれまで、神社における「ケガレ」の観念をその祭儀に注目すること

<sup>4</sup> 波平恵美子、1974、「日本民間信仰とその構造」(『民族学研究』) 38 (3・4)

<sup>5</sup> 波平恵美子、2009『ケガレ』P. 39 講談社学術文庫

<sup>6</sup> 櫻井徳太郎、1985『結衆の原点—共同体の崩壊と再生』P. 41-45 弘文堂

<sup>7</sup> 上田賢治、1997「日本「神社」総覧(『別冊歴史読本 事典シリーズ28』) 新人物往来社

で研究してきた。例えば、拝礼において参拝者は、まず手を洗い、口をすすいで心身を清める。神事においては神職は、沐浴して心身を清め（潔斎）たのちに、禊を行く。このように神社における儀礼は、まずなによりも「ケガレ」を祓うことから始まるのであって、それは清浄かつ神聖な「ハレ」の状況を作り出し、神を招来するにあたって欠かすことのできない手続きである<sup>8</sup>。

しかしその一方で祓いを受けずに神と向き合うことが可能な場もある。例えば神霊を神社から旅所や街まで運ぶ「神輿渡御」がそれである。神輿の行列が街を練り歩くとき、多くの人々は道端あるいは玄関の前で神輿に向かって手を合わせ祈りを捧げる。この例のように神社の外に運び出された神霊に対して人間が相対するとき、神の神徳<sup>9</sup>は心身の「ケガレ」を清めることなくしてどのように得られるのだろうか。本論は、竹駒神社の初午大祭を手掛かりにして、「ケガレ」が、どのような過程で祓われ、「ハレ」に転換するかを明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の対象と方法

分析対象となるのは、平成25年3月17日から23日まで執り行われた竹駒神社の初午大祭である。この七日間には、「お茶会」、「全国銘菓奉献展」「奉賛絵画展」、「御神輿渡御」、例祭が行われた（表1を参照）。

---

<sup>8</sup> 波平恵美子、2009『ケガレ』P. 21 講談社学術文庫

<sup>9</sup> 神徳とは神の働きによる、威徳のこと。人の尊信・崇敬によって一層発揮される神の徳分で、一般的には祈願により期待される商売繁昌、交通安全、学業成就、安産などの特定の利益や結果をもたらす神威のことをいう（福井孝彦、1994：389『神道事典』）

行事名	日時	場所	内容
お茶会	3月17日(日)	躬修殿	裏千家淡交会宮城支部の協賛により 参拝者にお茶席を設けた。
全国銘菓奉献展	3月17日(日) ～23日(土)	境内 特設奉献場	全国各地から銘菓が奉献展示された。
奉賛絵画展	3月17日(日) ～23日(土)	社務所大広間	氏子及び愛好者による洋画・水墨画等 数々の名画の展覧会。
御神輿渡御	3月17日(日) 午前10時～ 午後2時30分	岩沼市内巡幸	岩沼市指定無形文化財「竹駒奴」を先頭 に、稚児神子行列等、総勢600名の御奉仕 により絢爛豪華な平安絵巻が繰り広げられ た。
例祭	3月21日(木) 午前11時斎行	社殿	神社で最も重要な祭儀で初午大祭の5日目に 斎行された。

表1 平成25年度竹駒神社初午大祭の行事

本論において用いられるデータは次のような方法で収集した。まずは、前夜祭で行われる「御霊移し」とその翌日に行われる「神輿渡御」の非参与観察をした。前夜祭の儀式はどこで、どのように行われるか、どのような人たちが参列するかを観察した。そして翌日の「神輿渡御」は、どのように行われるか、どのような団体が参列するか、どこからどこまで練り歩くか、行列が通る際、人々はどのようなことをするかを観察した。

次に、初午大祭が終わった後、竹駒神社の初午大祭の担当者一人である神職に対して、主に竹駒神社の初午大祭の歴史や前夜祭と神輿渡御で観察したことについてインタビュー調査を行った。

以下ではまず、調査対象である竹駒神社を概観したうえで、平成25年に行われた初午大祭を記述し、本論の問いを考察する。

## 4. 竹駒神社の概要

### 4-1. 由来

竹駒神社は宮城県岩沼市稲荷町に鎮座し、日本三大稲荷の一つに数えられる神社である<sup>10</sup>。その縁起<sup>11</sup>によると、竹駒神社は次のような経緯で人皇 54 代 仁明天皇<sup>12</sup>の御宇、参議小野篁（おののたかむら）<sup>13</sup>によって創建されたという。

承和九年（842、平安）6 月、篁が陸奥守を拝命し、国司として多賀城の陸奥国府へ赴任するに際し、山城国紀伊奈利山に詣でた。そこで篁は祀られている稲荷明神を国府鎮護の神と考え、東北開発や殖産興隆<sup>14</sup>を祈ると共に、国司としての大役を無事に果たすことができるよう<sup>15</sup>祈ったと言われる。その後篁は白狐の姿を借りて現れた明神を神の顕現として畏み、分霊を小箱に納めて、鎮守府に向かうこととなった。日を経て奥州名取郡に入り、南長谷村の橋にさ

---

<sup>10</sup> 小野和輝、1979『神社辞典』。

竹駒神社が日本三大稲荷といわれることは『竹駒神社』の緒言にも書かれている。文献では、稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社以外にもう一つがどこを指しているかは書かれていないが、竹駒神社では、「伏見稲荷大社、笠間稲荷神社、と竹駒神社」ということが窺える。Wikipediaを見ると、「日本三大稲荷」と称される神社が複数存在する。宮城県岩沼市の竹駒神社、茨城県笠間市の笠間稲荷神社、愛知県豊川市の豊川稲荷妙厳寺、大阪府東大阪市の瓢箪山稲荷神社、岐阜県海津市の千代保稲荷神社、広島県福山市の草戸稲荷神社、佐賀県鹿島市の祐徳稲荷神社、岡山県岡山市北区の最上稲荷山妙教寺、奈良県大和郡山市の源九郎稲荷神社が挙げられる。

伏見稲荷大社では、「三大稲荷は地域により異なる」として、三大稲荷の 3 社を限定することはしていないと説明する。

この三大という基準が不明であるが、それぞれの神社は自分のところが三大の一つだという言い方をしていることが事実である。

<sup>11</sup> 宮城正俊編、1993『竹駒神社』P. 59-60 竹駒神社

<sup>12</sup> 平安前期の第 54 代天皇。嵯峨天皇と橘嘉智子の子。学問を好み、老荘の説や『群書治要』などを通覧。生来病弱なこともあって医学にも詳しい。

<sup>13</sup> 小野篁は仁寿 2 年 12 月 23 日（852）51 歳で没した。延暦 20 年（801）生まれ。刑部大輔より承和 9 年（842）42 歳で、陸奥守に叙された（岩沼市史編纂委員会、1984：1212）。

<sup>14</sup> 中村陽、2009：157。

<sup>15</sup> 佐々木喜一郎、1950：2－3。

しかかったとき、狐が啼き続けた。篁が箱を開けてみると、神霊が白狐の姿となり、たちまち走り出て武隈（現岩沼市阿武隈）の茂林の中に駆け入り、姿が見えなくなった。そこで、篁は白狐の姿が消えた辺りに神社を創建した。それがこの竹駒神社の始まりであると言われている。

#### 4-2. 祭神

次に竹駒神社の祭神である稲荷の神についてみておきたい。一般に稲荷の神は、その名のごとく、稲の収穫豊穰を守護する農耕神として信仰を集める神といわれている。それが中世から近世にかけて工業・商業が盛んになると、殖産興業の神、屋敷の神へとその神徳が広がり、大名、町屋、商家・漁家にいたるまで稲荷大神が勧請され、多くの信仰を集めるようになった<sup>16</sup>。全国にある稲荷を祀る神社数は、八幡・伊勢・天神に次いで4番目に多く、4、9084社中の2924社であった（東京新聞大図解 2007.12.2）。

竹駒神社の発行する『竹駒神社』によると、竹駒神社の祭神は古くより稲荷大神とされ、倉稲魂神・保食神・稚産霊神の三柱の神々が祭られている。稲荷大神とはこの三柱の神々をまとめて奉斎する神号であり、五穀主宰の大神を意味している。「五穀」とは、一般に米・麦・粟・豆・黍など五種類の穀物であり、竹駒神社の神徳の中心が、古くより五穀豊穰の農業神であったことが明らかになる。衣食住を守護する神社として尊崇を集め、また豊漁の神、商売繁昌の神、さらに殖産興業、除災招福、開運出世、芸能上達の神として、天下太平はじめ交通安全、航海安全、安産祈願などに至るまで、多様な利益をもたらす神社であるという<sup>17</sup>。

#### 4-3. 祭事

続いて竹駒神社で行われる祭事を概観しておきたい。竹駒神社で行われる祭事は、年頭の歳旦祭にはじまって、大晦日の大祓式・除祭に至るまで、年間を

<sup>16</sup> 肥後和男、1999「稲荷信仰のはじめ」『稲荷信仰事典』P. 63 - 65

<sup>17</sup> 宮城正俊編、1993『竹駒神社』P. 59 竹駒神社

<sup>18</sup> 律令〔大祓条〕には6月・12月の晦日の大祓の行事の次第を規定する。大祓は、朝廷や国衙で、恒例又は臨時に、人々の犯した罪や災気をはらう公的な行事。このうち18条は朝廷で、毎年6月・12月の晦日におこなうもの（井上光貞他、1977：538）。

通じて四十回前後に及び、月平均して4回程度行われている。なかでも旧暦2月の初午に行われる初午大祭は重要な祭事の一つである。初午大祭は7日間斎行され、年間の祭事の中で期間が最も長い。その他の祭事として神田祭事の田植祭がある。田植祭は、今日ではほとんど見られなくなった手植えによる奉仕であり、また6月30日と12月31日には大祓式が斎行される。大祓式とは、飛鳥時代の大宝律令<sup>18</sup>（701）によって国家規模の行事として斎行された神事であり、大祓により過去の罪や穢れを祓い清め、人間の本来の姿に立返り新しい生活の出発が祈られる。さらに上記の他、七五三祭、秋祭りなど多くの行事が行われている。

## 5. 初午大祭

### 5-1. 初午大祭の概要

以上、竹駒神社の概要を踏まえた上で、本論文の調査対象である初午大祭がどのようなものかをみていきたい。初午大祭は、一般には2月最初の午の日に行われる祭事である（岩井、1994）。竹駒神社の神職<sup>19</sup>によると、稻荷神が五穀豊饒の守り神であるとの信仰は、古くから深く農民の心に伝わるものであり、春の農事に先駆けて豊饒を祈るための祭事がこの初午大祭であるという。

初午大祭は、2月の初午の日に執り行われるが、この日は年によって違う。それは、明治に入ってから新暦が用いられるようにったためである。旧暦の2月の午の日は、早い年は新暦2月中に、遅い年は新暦4月の初めになることも稀ではない。また午の日は、2月中に2度は必ずあり、年によっては3度あることもある。

初午大祭は、京都の伏見稻荷大社に伝わる「口授十五箇條の解、二、鎮座の事」にその起源が記されている<sup>20</sup>。それによると、和銅3年は四季の連鎖と循環が全く不順であり、そのうえ農作物の生育に欠かせない降雨が少なく、干天続きとなった。そのために五穀が実らず凶作となり日本国中が飢饉に見舞われた。さらにこの時は養蚕も思うようにまかせず、機織もできない有り様で農民は困苦欠乏との闘いを余儀なくされたのである。そのときの第43代元明天皇（女帝）は、そうした有様を非常に心配した。そこで天皇は詔を下して使いを

<sup>19</sup> 男性、禰宜。平成25年3月の聞き取り調査。

<sup>20</sup> 佐々木喜一郎、1969、『初午のはなし』。



名山、大川に遣わし、天つ神国つ神を祭って祈願を命じたという。天皇は神の教示によって伊呂具秦公に命令して、翌年の和銅4年2月初午の日に、京都の稲荷山の三ヶ峰に稲荷大神を祭ったのであった。そうするとその年の神の靈験があつて五穀は大豊穰となり、養蚕での取繭量もあがり機織物もよくできて国中の農民は富み栄えた。それ以来2月初午の日に天災飢饉の大難を救った稲荷大神に礼参りをするように全国に布令を出した。これが2月初午の日に参詣する習わしの始まりであるという。

## 5-2. 竹駒神社の初午大祭概要

竹駒神社もまたこの2月初午の日を初午大祭の祭日としている。とはいえ、竹駒神社の初午大祭は、日本三大稲荷神社に数えられる伏見稲荷大社や笠間稲荷神社が新暦の初午に一日で執り行われるのに対し、竹駒神社は、旧暦の初午の日に七日間執り行う点が異なる。竹駒神社では第1日目を「初日」、4日目を「中日」、7日目を「仕舞日」と呼び、期間中の日曜日<sup>21</sup>には神輿渡御、第5日目には例祭が執り行われる。

竹駒神社の保有する資料（著者不明）によると、竹駒神社が旧暦の初午の日を初午大祭とする理由は、次のように書かれている。

- (一) 2月の初午の日は、古来先人は長い厳冬からようやく解放され、万物が躍動する春の息吹きと人々の喜びを強く感じさせる東北独特の気候であること、しかも農事に先駆けて農業の守護神である稲荷大神に、その年の豊作を祈る祭儀であること。
- (二) 東北の農業には、まだ旧暦の暦が無視できない伝承行事や祭りなどが温存されていること、また竹駒神社の祭事の旧正月、明神講祭等は、農事暦であること等、東北の風土に密着した祭りであること。
- (三) 東北の農閑期である冬期間の出稼ぎ者が、出稼ぎから帰り、多忙な農事に

---

<sup>21</sup> 竹駒神社に提供して頂いた資料によると、神輿渡御が日曜日に行われる理由は次のようにあげられる（著者不明）。

- (一) 氏神的性格。世話人会、奉賛会、奴奉仕講、神輿奉仕講、神馬奉仕団、供奉員、稚児神子等々竹駒神社は地域社会の強力な協同意識と連帯意識によって支えられていること、また神社の歴史や伝統に対して清らかで麗わしい誇りをもっているというのが実態である。その反面祭に関わる奉仕の面になると日曜日をという声が大半を占めているのが現状である。

備えるという社会生活上の特殊性があること。

以上よりこの祭が東北特有の自然と長年月にわたる生活慣習から織り上げられた郷土色豊かな祭であること、更には竹駒神社の由緒と縁日を尊重するという事等から、旧暦の2月の初めの午の日が初午大祭として最適であると信じられている。

さらに初午大祭が7日間に亘って執り行われることについてはこの地域特有の事情があることが、竹駒神社の縁起記<sup>22</sup>から推察される。竹駒神社では初午大祭の時期に、他国の人や近隣の地方の人々が集まり混み合い、芸人やからくり人形のたぐいなど、もろもろの種々雑多な芝居の興行が神社の庭に並び列なまって賑わう。また慣例上、この間には神社境内で養蚕に関する物や農具類を売る市が開かれていたという。

更にかつてはこの初午の日から100日間、岩沼の宿場で馬市が開かれていたともいわれている。これは、創健者小野篁が国守であった時に命ぜられて起り、現代に至るもので、その間千数百年の長きに及んで、ますます盛大に活況を見せているとされる。代々の国守は、この馬市で優れた良い馬を数多い中から選抜し、神に奉り、また自分の乗馬を選び出して手に入れることを通例としている。馬市は、初午大祭の初日（初午の日）が百日間の長い期間開かれた。

- 
- (二) 崇敬神的性格。竹駒神社は小野篁によって創建されて以来、東奥開拓の大神として歴史的に広い崇敬圏を持つ神社として発展してきた。特に稲荷信仰を基盤とした祭神の神徳を宣揚するにつけてもこれからの若い世代を積極的に信仰指導し灯明料世話人、講中、崇敬会等組織の拡大強化が必要とされる。このようなことに対処するにしても日曜日をもっとも望ましいところと思われる。
  - (三) 観光的性格。世はまさにレジャーブームの時代に入ったといっても過言ではない。現代の観光旅行的風潮は、企業等での週休二日制の実施を初めとして余暇時間の増加からくるものであるが、それを如何にして神社と結びつけるかが現代的な課題だと考えるものである。現在管区ブームによる社頭収入は、増加の傾向にあり、当社の大事な財源の一つとなっている。これらの参観や参拝も時代相を反映し、土曜日、日曜日に集中するという現状なのであるという。

<sup>22</sup> 竹駒神社の縁起記は、仙台藩五代伊達吉村の命により、仙台市青葉区八幡町の名刹竜宝寺の住職実政法印の記述になるもので、巻末に奥書きと吉村公の署名、書判（花押）が付され、享保三年（一七一八）六月中旬の年記が見られ、社宝として遺されている（石垣、1991：38）。

その後 50 日間になり、残り 50 日間は仙台の国分町が会場となったと記されている（石垣、1991：38）。

このようにして、当時は、初午大祭には単に農業の神としてのみ祀られていたのではなく、馬市を含むこのような縁日の模様によって豊かになり大勢の人々が訪れて来ていたことが読み取れる。

## 6. 竹駒神社の初午大祭の実態

以上、資料から読み取れる竹駒神社初午大祭の概要を踏まえた上で、平成 25 年に行われた竹駒神社の初午大祭を見ていきたい。まずは祭日の前夜に執り行われる前夜祭から見ていきたい。

### 6-1. 前夜祭・霊移し

ここでのいう前夜祭は、初午大祭の前の晩に行われる神事のことであるが、平成 25 年の初午大祭は初日が日曜日であったため、前夜祭は翌日に行われる神輿渡御の「霊移し」の行事と一緒に行われた。霊移しとは、神霊を本殿から神輿堂に安置している神輿に移すことである。その日の午後六時半頃、竹駒神社の職員が本殿から神輿堂までの道に絨毯を敷く。拝殿の中には神事の準備をしている巫女や神職の姿が見える。境内や社務所にはぞくぞくと参詣者が集まって来る。



図1 竹駒神社の社殿、前夜祭直前の様子  
(H. 25 年 3 月 16 日撮影)

午後 8 時から社殿で前夜祭の神事が始まる。神事に参列する人は、総代、世話人会、竹駒奴、横手市旭奉賛会や神輿を担ぐ会の神輿渡御の関係者と、夜籠をかねて、初午大祭の一番祈祷に並ぶ一般参列者である。夜籠をする人たちは

30 名程度で各県から集まってくる。全員一番祈禱を待ちながら神社の社務所の 2 階にある広間に泊まる。

前夜祭・霊移しは厳粛に行われる。式次第は下記の通りである。

- (一) 修祓：神霊を招く前に、まず参拝者全員の心身の罪穢れを祓う。
- (二) 斎主一拝：祭を主宰する神職が神前に進み一拝する。参列者は斎主に合わせて一拝する。
- (三) 本殿の扉を開く：本殿の扉を開閉するのは神社の神職の中でも最も上位である宮司の役目である。次席の禰宜が周囲を戒める先払い「警蹕」<sup>23</sup>を唱える。
- (四) 神饌を供す：斎主は一拝してから神の召しあがりものである神饌を神前に供える。
- (五) 祝詞奏上：斎主が祝詞を奏上している間は、次席の禰宜は全員手を床につき、60 度の礼の姿勢を取る。椅子席の参列者も立ち上がり、60 度の礼の姿勢を取る。
- (六) 神楽舞を奉る：2 人の巫女が登場して雅やかで美しい舞を神前に奉納。
- (七) 玉串を奉り拝礼：斎主に続き、各団体の代表者が神職から玉串を受け取って神様に捧げる。
- (八) 神饌を徹す：斎主が一拝してから神前に供えられたものを取り下げる。
- (九) 本殿の扉を閉ず：扉を閉じる前に霊を移す儀式が行われる。本殿から神霊を移す時には、明かりが消され、周りは真っ暗になる。そして神霊が人の目に触れないようにするため、神霊を持つ宮司は他の神職たちの持つ白い布で周囲を囲まれる。懐中電灯の光の下で先頭を歩く神職が警蹕を行い、宮司、そして参列者全員がゆっくりと本殿から神輿堂まで移動する。宮司は白い布に囲まれたまま神輿堂に上がって神霊を神輿の中に移す。参列者は全員神輿堂の前で見守る。やがて霊移しが終わると明かりが付けられ周りは再び明るくなる。こうして神様は一晩中神輿に鎮座するが、神職と参列者は拝殿に戻って、宮司一拝一同合わせて拝礼し儀式を終える。

真っ暗な中で御霊を移すことについて、神職 A は次のように説明する。『古事

<sup>23</sup>「警蹕」とは、祭祀・祭礼において、降神・昇神、開扉・閉扉、或は渡御の祭に、神職などと祭りにかかわる者が、「おー」と発する声（井上順孝、『神道事典』1994：235－236）。

記』によれば、天照大神が天岩戸に隠れると世の中は真っ暗になった。そこで、他の神たちは知恵を絞って神楽を舞ったりした。外が賑やかなことを不思議に思った天照大神が少しだけ天岩戸を開けて覗いたところ天岩戸をこじ開けられ、世の中が明るくなった。神様というのは神聖なもので、目に触れてはいけない。つまり、天照大神がお隠れになったことによって神の存在が顕在化したのである。それ故、移動するときは夜の真っ暗な中で行うのが一番いい」という。

## 6-2. 発興祭

平成 25 年の初午が日曜日（3 月 17 日）であったため、神輿渡御は初午大祭の初日に行われた。午前 7 時から神輿渡御に関係する団体と一般参拝者が次々と集まり境内が賑わう。それらの団体のメンバーは普段とは異なる特徴のある衣装を着ている。例えば、神子は巫女、稚児は神主に似せた衣装を着ている。



図 2・3 竹駒神社の境内において発興祭の前の様子（H. 25 年 3 月 17 日撮影）

神輿が出発する前に発興祭が斎行される。これは神輿渡御の期間中怪我や禍事が起きないように、関係する人々がお祓いを受けるためである。斎行場には全員が入りきれないため、この発興祭に参列したのは、稚児と神子を除いて、総代、世話人会、消防団、竹駒奴、奉賛会、神輿を担ぐ会の神輿渡御の関係者のみである（表 2 を参照）。

稚児と神子は、神事において直接祓いを受けていないが、各自に紙垂が付いている榊の枝を持たせている。神職 A は、榊は神霊の宿る木として知られ、小さい子供に、ケガレなどが付かないように持たせるという。

発興祭はその目的の通り、神輿渡御に参加する人々の祓いが主となる。そのために、式次第もより簡素である。つまり、修祓で清めを行うことから始まり、祝詞奏上、各団体が玉串を奉って拝礼し、終了する。

### 6-3. 神輿渡御

神職Aによれば、参拝者が神社に行って自分の思いを神様に伝えるというのが、本来の神と人間との関わりである。しかし、祭りの時は、神様が神輿に乗って町に降りて行き、人々の生活の様子を見る。神様が自ら歩くことによって、祭りの日に直接神社に参拝できない参拝者に神徳を分け与えるという。そのためか、神輿の行列が近くを通った際に手を合わせて拝む参拝者の姿が数多く散見される。

発輿祭が終わると神輿は出発する。まず先頭を歩くのが竹駒奴<sup>24</sup>である。「お先」が六名、小鳥毛が八名、大鳥毛が四名、箱が4名、計20名で境内を出る前に「奴振り」という独自の動きとかけ声で毛やりとハサミ箱の投げ受けを披露する。そのあとも引き続き、市内を練り歩く最中、決まった時間と場所（図10の参照）で立ち止まって披露する。そのダイナミックな技に見ている人たちは思わず息をのむほどである。

境内を出た後、御神輿渡御の行列の先頭と後尾を歩くのが騎馬である。先頭にいる騎馬は、神輿の行列の道を作り、後尾にいる騎馬は、後ろから行列を守る役目をする。



図4 神輿渡御の先頭を歩く竹駒奴の奴振り（H.25年3月17日撮影）

<sup>24</sup> 竹駒奴は、その歴史をみると、江戸時代、伊達家直属の奴として、岩沼城主の古内家の管理監督下に置かれ、藩主参勤交代の折には大名行列の先陣を勤めていた。貞享一六八七年に古内家第四世の重興公が岩沼の地を拝領した時に、足軽衆は現在の仙台市の西多賀鉤取から移住してきた。当時の奴の構成は「御先」が三人、「挟み箱」が四人、「毛槍」が八人、「大鳥毛」一人の計十七人であったという。



奴の次は稚児と神子の行列である。神子は巫女、稚児は神主に似せた衣装を着ている。稚児と神子は小学1－2年で、市内の各町内にいる世話人会から紹介してもらう。子供が参列する目的に関して、神職Aは、「子供が参加したほうが華やかになるからである。昔は子供は出られなかったが、昭和30年ごろから参加するようになり、それによって大勢の人が見に来るようになった」と説明する。



図5 稚児



図6 神子

(図5・6 H.25年3月17日撮影)

稚児と神子の後ろには竹駒神社の行列が続く。竹駒神社の行列は、太鼓、社名旗、社紋旗、神様のお供え物を収めるための唐櫃、椿、獅子頭、花籠など神社の飾り物を担ぐ人たちである。

先頭を歩くのが塩撒である。御神輿渡御においては塩撒の人は重大な役目を果たしている。『古事記』に伊弉諾命が黄泉の国で腐敗した妻の姿を見て逃げ帰った後、海水で清める「禊祓」をしたという逸話もあるように、塩は古代より「不浄のものを清めるもの」として捉えられてきた<sup>25</sup>。神社の観点から考えると、神社の内を清浄であると考え、外は相対的に不浄の地であるから、神輿が出るときは必ず塩を撒いて沿道を清めるのである。

竹駒神社の行列の中では、獅子と花籠が観客に人気がある。沿道、特に子供や年寄りの方が獅子を呼んで頭を噛んでもらう。神職Aは、獅子に子供の頭を噛んでもらうと頭がよくなり、病気をしない、その後にご利益もあると、日本では広く信じられているという。また、花籠も、その中から舞い散る「花び

<sup>25</sup> 福永武彦、2003『現代語訳古事記』P. 49－50

ら」と呼ばれる 13 種類の祈願成就の紙札を一生懸命に拾う氏子や崇敬者達が各所で多く見られた。



図 7 花籠



図 8 花籠から落ちた花びら

(図 7・8 H.25 年 3 月 17 日撮影)

竹駒神社の行列のすぐ後ろに、続いて御神輿が来る。その先頭を歩くのは大幣<sup>26</sup>を持っている神職である。本来は、大幣は、お祓いをする人や物に向かって左・右・左と振り、これによってケガレが落ちると考えられている。

神輿の重さは一トンもあるため、担ぎ手は紫・赤・青・黄色のたすきで四班に分けられ、交替で担ぐ。一班は 30 名で身長によって分けられる。「生息を御神体につけないように」<sup>27</sup>と、全員白マスクを着用する。神輿を担ぐのは岩沼市の神輿を担ぐ会と秋田県横手市旭地区の奉賛会の人たちである。旭地区の奉賛会について、神職 A によれば、昔は、横手市の旭地区の人たちは農家が多いため竹駒神社によく参拝に来ていた。当時神輿の担ぎ手が足りなかったため、旭地区の人たちに頼んで来てもらうようになった。昭和 63 年の初午大祭から毎年手伝いに来ている、とのことである。

<sup>26</sup> 大麻は榊の枝に麻と紙垂を付けた祓の具である。

<sup>27</sup> 男性、神輿を担ぐ会





図9 岩沼駅前を通る神輿（H.25年3月17日撮影）

神輿渡御のコースは毎年同じである（図10を参照）。このコースは旧岩沼町を廻る。神職Aは、昭和30年の市町村合併で、玉浦村と千貫村が合併して岩沼市になったが、初午大祭は元々旧岩沼町のお祭りだったため、神輿が練り歩く順路は旧岩沼町内に限られる。行列の人数が600－700人いるため、細い道を避けて、道幅がある道路を通らざるを得ないと説明する。

神輿渡御は大別すると、前半と後半に分かれ、前半は北方、後半は南方を練り歩く。前半は午前10時から12時まで、後半は午後1時から2時半までである。12時から1時まで休憩が入るが、休憩場所は岩沼小学校である。神輿の中にいる神様も休憩する。休憩のとき神様に供物を供え、小学校の門前で神事が行われる。神職Aによれば、神輿が休む旅所では、必ず神事を行う。神饌が入っている唐櫃を担ぐのは、そのための準備であるとのことである。1時になると再び神輿渡御が始まる。岩沼小学校を出ると、竹駒神社を通り越して南方に向かう。

南方を回り終えると、2時半に行列が竹駒神社に帰ってくる。馬の行列（先駈騎馬、金幣騎馬、御神馬、陣笠騎馬）以外は全員境内に入って社殿の前に集合する。神輿は神輿堂に安置する前に神輿の中に鎮座している御神霊を再び本殿に移す。特別な儀式はなく、神輿渡御の行列に参加した人たちが見守る中、宮司は神職によって白い布に覆われて神輿の中に鎮座している御神霊を取り、本殿に移す。その方法は先述した前夜祭のときと同じであるが、このとき拝殿に入るのは神職のみである。それが終わると神輿渡御が終了し、解散する。

## 7. 考察

### 7-1. 初午大祭の意義

初午大祭で、竹駒神社にとって一年の祭事の中で最も大きな祭りである。これは、実施期間や、行事、祭りに関わる人々から見ると分かるのである。その中で一番大きい行事は神輿渡御である。神輿渡御には、直接的及び間接的に多くの人々が関わっている。

神輿渡御に直接的に関わる団体は、彼らは肉体的及び精神的な準備を行っている。例えば、奴の場合は、肉体的な準備として毎月稽古を行っている。さらに、初午大祭の日が近づいてくるとき、稽古の回数を増やしている。一方、精神的な準備としては、境内内で稽古を行ったり、団体のために神社の神職に祈禱を依頼したりする。このようにして神及び神社との係わりをできるだけ保っている。基本的には、1年に一回程度パフォーマンスを披露するが、全て氏神に捧げるのである。これらの裏には単なる世俗的に奴という無形文化が絶滅しないように行うのみならず、初午大祭は稲荷信仰では特別な日であり、この日に祭りに関わることによって良いことがあるという宗教的な要素も働いているといえる。

### 7-2. ケガレからハレへ

例年と同様、平成25年度の神輿渡御は前夜祭に行われる御霊移しの儀式からはじまった。御霊移しの儀式は厳粛に行われた。普段神殿に安置している神霊を、この時にのみ、一夜神輿堂に安置する。御霊移しは初午大祭のような神輿渡御の時しか行われないため、神社にとって見たならば、非日常的な行事であるといえる。

神輿渡御の当日は、朝7時から神輿渡御に関係する団体と参拝者が次々と集まり境内が賑わった。特に神輿渡御に参加する関係者は、それぞれ普段と異なる特別な服装に身を包み、それぞれの役柄を誇りをもって信じているように見える。例えば、神子は巫女、稚児は神主に似せた衣装を着ている。

神輿渡御が出発する前に、境内で神輿渡御の参加者の全員と神社に来ている参拝者が参列して発輿祭が行われた。この儀式の目的は、神輿渡御の期間中怪我や禍事が起きないように、関係する人々がお祓いを受けるためにある。しかし、特に神輿を担ぐ人々たちにとっては、祓いをすることによって初めて神様に接することができるという目的でもある。

神輿渡御が出発する際には、道沿いに並んでいる人々が多くいた。彼らは神社に直接参拝に行けない人たちと、行列を待っている人たちである。そのなかで、神輿が通るとき、熱心に手を合わせて何か願い事を唱える人もいた。このような行動は、普段神社での神様の参拝し方とは異なる。つまり、神社では参拝する前に参拝者は必ず心身を清めなければならないのである。さらに、神主に祈禱を依頼する場合、その神事で修祓も受けなければならない。なぜなら、祓うことによって参拝者の身に付いていると思われるケガレが祓われ神様の神徳を得ることができるようになるのである。

これについて筆者は次のように分析する。初午大祭は竹駒神社にとって一番大きな祭りである。一方、氏子や崇敬者にとっても初午大祭の日は特別な日、いわゆるハレの日である。この特別な日にだけ、神様は氏子や崇敬者の住んでいるところに行き、彼らに神徳を与える。これを神様の恩返しとして捉えることができる。つまり、普段の場合は、氏子や崇敬者は神社に行き、神様に願い事を唱えるが、初午大祭の時は、神様が氏子のところに行き、神徳を与える。前者は日常的、後者は非日常的なことといえる。そのため、このようなハレの日に身を清めるということは、もはや必要とされないのである。というのも、初午大祭が行われる日がハレの日のため、時間的にも空間的にもハレになるからであると解釈できる。

## 8. おわりに

竹駒神社の初午大祭、特に前夜祭・御霊移しと初日に行われる神輿渡御を見てきた。この日には、夜籠をして、一番祈禱に参列する人がいれば、一番祈禱だけに参列して、帰宅する人もいる。また、初日の朝、神社に来て祭礼に参加する人もいる。これらの人たちは、直接神社に出向いて参拝する。一方、病気などのため、神社に行くことができず、神輿が通る道路にいて神様を拝む人もいる。

こうして、氏子・崇敬者は人それぞれとさまざまな関わり方で初午大祭に参加する。狭い範囲で考えればそれぞれ異なった個別の祈りを捧げていることになるが、広い範囲で考えれば、その目的は一つである。つまり、竹駒稲荷の「神徳」を得るためである。しかし、その神徳を得るには絶対的な前提条件がある。それは、祈りを捧げる者が清浄な状態にあるということである。

そうした場合は、直接祭儀に参加する参拝者は、神道祭儀の手順に従って修

祓を受け、ケガレを祓われたのちに神と対峙するので当然に神徳を得られるのであるが、間接的に祭儀に参加して拝む人たちは祓いを受けても神徳を得ることができる。それは、初午大祭のような祭りは、特別な日、いわゆるハレの日であるため、この日はみんな普段の生活から離れ、特別な服装し、特別な食事をし、特別なことをする。それだけではなく、気持ちも高揚する、氏子と崇敬者は神様と一緒に喜ぶ。これらのことによって、身に付いているケガレが清められるというふうに意味づけることができると考えられる。

番号	所役名	着装	人数
1	太鼓	白衣	3
2	先駆騎馬		1
3	奴	奴着	36
4	袷	袷着	20
5	稚児・神子	神職・巫女着	
6	消防団		20
7	塩撒	塩撒着	2
8	梓付太鼓	白衣	4
9	猿田彦	天狗着	1
10	獅子	白衣	4
11	先導神職	狩衣	1
12	社号旗	白衣	4
13	御楯	狩衣	
14	御鉾	狩衣	
15	御弓矢	狩衣	4
16	御太刀	狩衣	2
17	四神旗	白衣	4
18	唐櫃	白衣	4
19	大真榊	白衣	12
20	楽人	直垂	3
21	荷鉦鼓	白衣	4
22	荷太鼓	白衣	6
23	錦旗	白衣	8
24	五色旗	白衣	10
25	金幣騎馬		3頭
26	隨身		2
27	賽銭箱	白衣	6
28	責任役員総代	袷	15
29	御神輿	担ぎ手着	130
30	宮司	衣冠	
31	立傘	白衣	1
32	御神馬		
33	陣笠騎馬		3
34	花籠	白衣	2

表2 御神輿と一緒に練り歩く御列

奴 振 り 場 所			
番 号	場 所	時 間	
(1)	稲荷町	菊寿司前	10:05
(2)	作間屋前		10:10
(3)	中央1丁目1	七十七銀行前	10:15
(4)	中央1丁目2	武田印刷前	10:20
(5)	中央1丁目3	野崎屋前	10:25
(6)	中央2丁目	岩沼小学校正門前	10:30
(7)	中央3丁目1	かめや前	10:35
(8)	中央3丁目2	仙南信用金庫前	10:45
(9)	中央4丁目	津谷川徹夫宅前	10:50
(10)	中央4丁目	進藤蔵宅前 折返し	11:00
(11)	館下第2	登美寿司前	11:30
(12)	館下第1	岩沼駅前	11:40
(13)	中央2丁目	岩沼小学校前 昼食	11:55
(14)	中央2丁目	つるや前	12:50
(15)	大手町	ふたき旅館前	12:55
(16)	大手町	ホテル原田前	13:05
(17)	稲荷町	大鳥居前	13:10
(18)	桑原第1	五栄信用組合前	13:20
(19)	桑原第2	聖徳太子堂前	13:30
(20)	桑原第3	桑原1丁目信号手前 折返し	13:35
(21)	藤浪	トーケルライフカンノ前	13:55
(22)	藤浪	竹中酒店前 折返し	14:00
(23)	本町第2	作勘ふとん店前	14:25

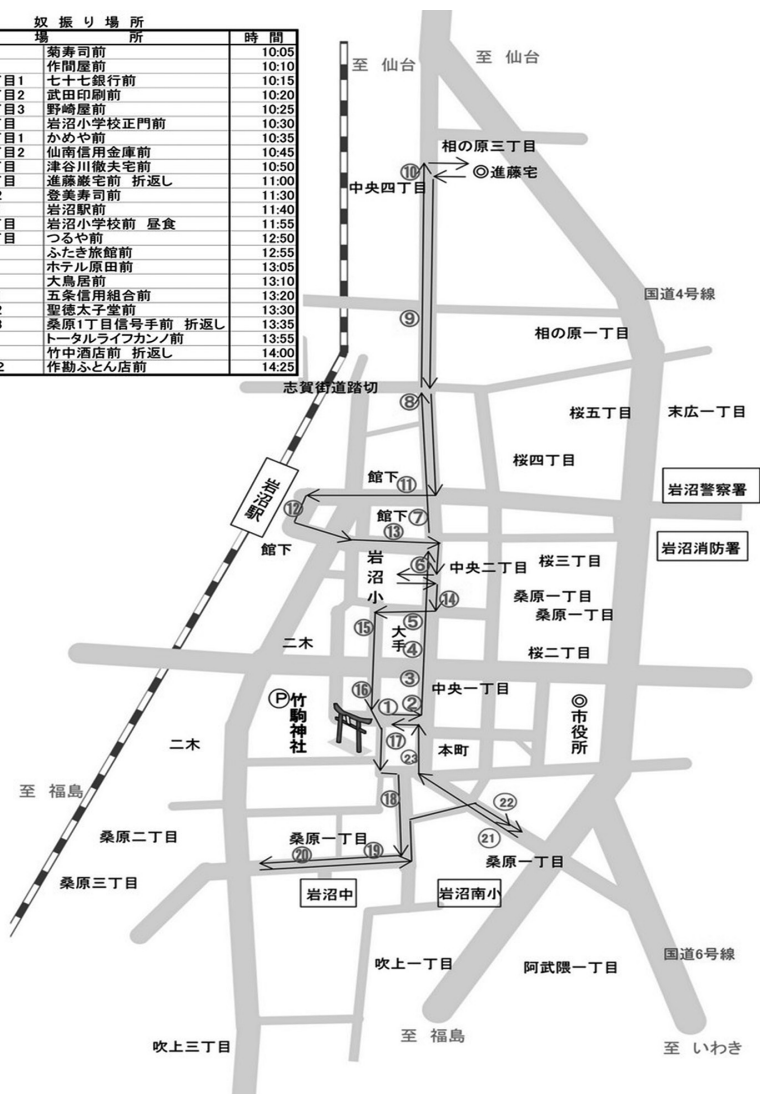


図 10 神輿と列のルートと奴振り場所の地図

## 参考文献

- 石垣正彰、1991『竹駒神社初午大祭』『みやぎ宗連報』宮城宗教法人連絡協議会  
井上光貞他、1977、『日本思想大系 3』岩波書店  
伊藤幹治、1973「日本文化の構造的理解をめざして」(『季刊人類学』) 4 (2) 京都大学人類学研究会  
岩沼市史編纂委員会編、1984、『岩沼市史』岩沼：岩沼市  
上田賢治、1996『日本「神社」総覧』新人物往来社  
大本敬久、2013『触穢の成立—日本古代における「穢」観念の変遷—』P. 9 創風社出版  
大森恵子、2012、『稻荷信仰の世界』慶友社  
國學院大學日本文化研究所編、1994、『神道事典』弘文堂  
佐々木喜一郎編、1961、『岩沼物語』岩沼観光協会  
櫻井徳太郎、1985『結衆の原点—共同体の崩壊と再生』弘文堂  
白井永二／土岐昌訓、1979、『神社辞典』東京堂出版  
全国神社名鑑刊行会史学センター／編纂、1962、『全国神社名鑑』上下巻  
全国神社名鑑刊行会史学センター  
東京新聞：大図解、「神社信仰」2007.12.2 No. 815  
宮城 正俊編、1993、『竹駒神社』竹駒神社  
中村陽、2009、『稻荷大神』戎光祥出版  
波平恵美子、1974、「日本民間信仰とその構造」『民族学研究』38 (3・4)  
———、1974、「通過儀礼における「ハレ」と「ケガレ」の観念の分析」  
『民族学研究』40 (4) 日本文化人類学会  
———、2009、『ケガレ』講談社  
日本国語大辞典第二版編集委員会、2001『日本国語大辞典』第二版 第 10 巻 小学館  
竹駒神社、2015、『すいとく』竹駒神社  
福永武彦、2003、『現代語訳古事記』河出文庫  
山折哲雄／川村邦光編、1999、『稻荷信仰事典』戎光祥出版

## サイト

- 笠間稻荷神社 <http://www.kasama.or.jp/>  
伏見稻荷大社 <http://inari.jp/>

## Another Perception of *Kegare*: Case Study of *Hatsuuma Taisai* at Takekoma Shrine

Alimansyar

This research purpose is to describe about the process of change from *kegare* to *hare* in a *matsuri* held in *Shinto* shrine. According to the *Shinto* belief, in order to purify their physical and spiritual from the dirtiness, every religious ceremony must be started with ‘purification’, which is called, *shubatsu*. Thus, someone who blessed their hope and pray would be granted by *Kami*. But, not all *Shinto* believers do purification when they attend the *matsuri*. The people, who do not do purification, are the ones who are not able to go to *Shinto* shrines due to some specific reasons, like affected by illness, busy working, etc. In the *Matsuri*, there is one part of the ceremony where *Kami* visit the residents by *Mikoshi*. The people who are absent from the *matsuri* with specific reason explained above, can only pray in the streets or in front of their houses. Theoretically, those kinds of people with the specific reasons should not be qualified to get blessed by God, because they have not purified themselves from *kegare*. However, based on the field work by author, those people could also be blessed by *Kami*. The reason those people could be blessed is that *Kami* intentionally visit *Ujiko* and *Sukeisha* to bless them in the *hatsuuma taisai*, a special day called *hare* for all sides, such as *Kami*, shrine, *ujiko* and *sukeisha*. The *Sukeisha* also accept the day of *hatsuma* festival with happiness. In this situation *kegare* in *sukeisha* will naturally purified, as a consequence, they will be able to receive the blessings from the *Kami*.

Keyword: *Kegare*, *Purification*, *Hatsuuma taisai*, *Takekoma Shrine*